

參河北  
設樂郡

香蓆培養圖解



香草培養圖解

夫レ三河ノ國北設樂郡ノ地勢タルヤ南設樂郡  
 ト疆域ヲ分チ段戸山ノ神秀ヲ鍾メ明神山ノ峻  
 嶺ヲ帶ヒ西北ハ美濃信濃ノ二國ニ接シ東ハ天  
 龍川ヲ界シテ遠江ノ國ニ對ス郡中到ル處山ナ  
 ラサルハ無ク樹林頗ル多ク水清クシテ氣朗カ  
 ナリ溪川數派ノ混々タル或ハ矢作、豐川等ノ源  
 流トナリ或ハ天龍川ニ注入スルアリ川勢皆急  
 流ニシテ舟船ヲ行ル能ハス道路ハ改修スト雖

へトモ尚ホ伊勢神佛坂ノ嶮坂アリテ運輸モ亦  
 不便ナリトス然レトモ郡中山林ニ富ミ民之ニ  
 頼テ利ヲ得ル者多ク其ノ良材ハ白木ト稱シテ  
 他方ニ輸送シ雜木ハ近年香茸培養ノ料ニ供ス  
 其ノ香茸ヲ作ルノ法ハ駿遠地方ニ倣フト雖ヘ  
 トモ熟練ノ者甚タ少ナク間其ノ法ヲ誤レルモ  
 ノアリ然レトモ居民此業ヲ利ト爲シ年々之ヲ  
 培養スル者多キヲ加フ若シ夫レ培養ノ法其ノ  
 宜キヲ得ルニ至リテハ其ノ廣益タル實ニ測ル  
 ヘカラサルモノアラン郡中ノ有志者此ニ見ア

リ曩ニ郡會ニ議シテ其ノ培養法ヲ研究セン  
 一ヲ謀リ縣廳ニ稟申シテ御料局員ノ派遣ヲ切願  
 ス是ニ於テ本局ハ予ニ派遣ノ命アリ乃チ去月  
 初旬郡ニ到リ爾來各村ヲ巡廻シテ其ノ實況ヲ  
 見聞シ且ツ各處ニ於テ香茸培養山ヲ造設スル  
 ノ必要ヲ談話シ併セテ香茸ノ生命史及ヒ其ノ  
 培養法ヲ圖解トナシテ之ヲ示ス有志者大ニ喜  
 ヒ之レヲ梓ニセン一ヲ需ム抑香茸ハ日本特有  
 ノ産物ニシテ未タ歐米諸國ニ之アルヲ聞カズ  
 而シテ此ノ物夙ニ支那人ノ嗜好ニ適シ明治元

年ニハ三十六萬四千斤餘ノ輸出ナリシモ年毎ニ増加シ二十四年ニハ百五十四萬八千斤餘ニ上レリ年々需用ノ多キヲ加フ已ニ斯ノ如シ而シテ生産ハ依然トシテ振ハス豈ニ慨嘆ノ至リナラスヤ思フニ北設樂郡ハ有志者アリ香蕈培養法ノ改良ヲ務ムル斯ノ如シ將來其ノ贏利ヲ得ルノ夥キ地トナルコトハ期シテ待ツベキナリ今圖解ヲ印行スルニ臨ミ聊カ所見ヲ述テ弁言トナスト云フ

田中長嶺謹誌

明治二十五年六月二十四日

三河北設樂郡 香蕈培養圖解

田中長嶺著

香蕈ハ志ひたけナリ之ヲ培養セント欲スルニハ先ツ香蕈生命史及ヒ其ノ發育上ニ關スル事實ヲ了知シ而シテ後實業ニ從事スベシ志ひたけハ繖菌ノ白子類ニ屬シ其ノ性質形狀ハ左ニ示ス所ノ如キモノナリ而シテ吾人ノ志ひたけト稱シテ食用ト爲スモノハ他ノ植物ニ比較スルハ彼ノ花ト一般ノモノニテ子實ハ果實ノ如ク菌絲ハ幹莖ノ如シ故ニ良キ志ひたけヲ得ント欲スレバ菌絲ノ繁殖ヲ務ムベキナリ菌絲豐饒ナレハ志ひたけノ多ク發生スルハ論ヲ俟タズ菌絲ハ常ニ氣候温暖ノ樹下落葉ノ下又ハ腐朽セル樹幹ニ寄リテ發育シ其ノ温度四十度ヨリ七十度ノ間ニ於テ菌絲集合シ外面ニ現レ始メテ志ひたけト稱セラル、ニ至ル而シテ繖ニアル所ノ子實ハ十分ノ開發ト同時ニ飛散シ

テ適當ノ濕リヲ得  
テ發芽シ梅雨ノ候

菌絲殊ニ伸長シ

處々ニ隔膜ヲ

生シ其ノ處

ヨリ枝ヲ發

生シ或ハ綫レ

テ繩ノ如キ形狀

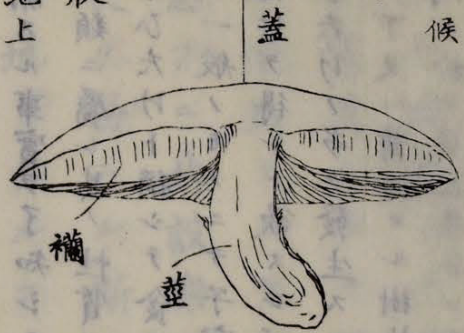
ヲ爲ス然レモ地上

落葉ノ間ニアルモノ

ハ單ニ菌絲アルノミニ

テ未タ志ひたけトナルモノア

ラズ而シテ志ひたけハ樹幹ノ



擔子囊及子實  
大ノ圖



擔子囊  
微鏡ニテ見ケル圖

子實大ノ圖



擔子囊  
子實

腐朽ニ寄ラザレバ形チヲ成  
シ得ザルモノナリ之レヲ他

ノ植物ニ比較スルキハ即

チ田畑ト一般ナルモノナ

リ然レモ各種ノ木質ニヨリ

志ひたけノ形狀及ヒ發生ニ

少差アリ因テ志ひたけヲ培

養セシニハ菌絲ノ生育セル處

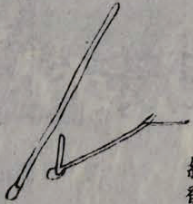
ト木類ヲ撰擇スルヲ肝要ト

ナス其ノ適當ノ木類中北設

樂郡ニ多ク繁茂スルモノハ

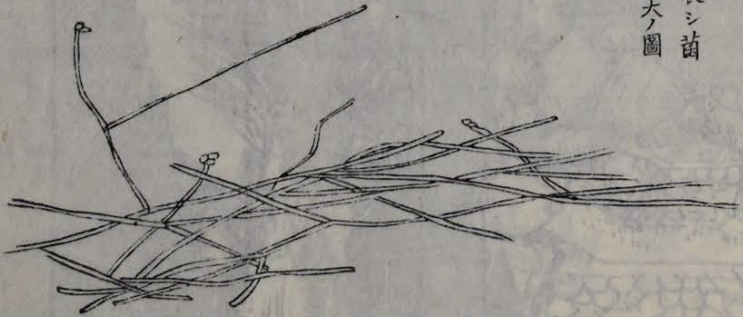
オホナラ又ミヅナワタカハク

又キマキアラシテアカシデヲ良トス



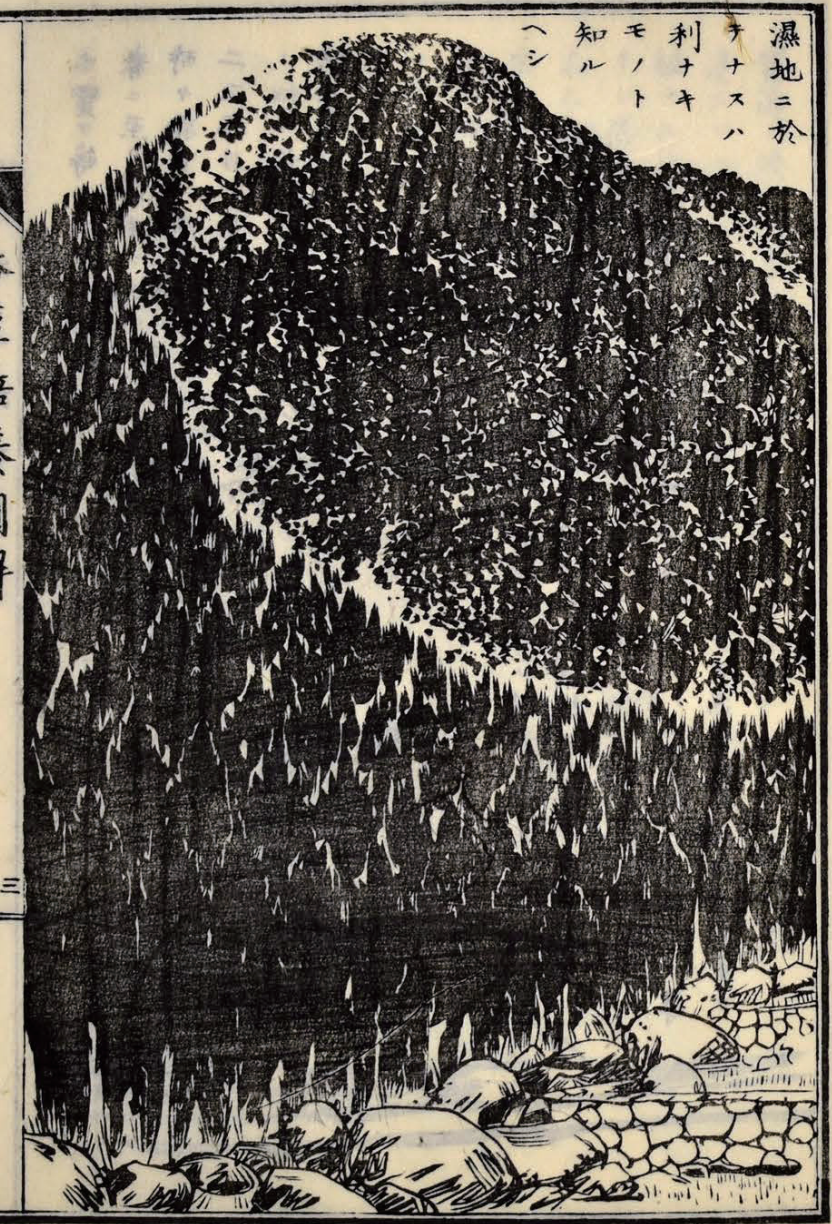
子實拆裂シ苗  
絲發芽大ノ圖

山中溫暖ノ處  
ニ於テ菌絲生  
育大ノ圖





志ひたけヲ作ラント欲スルニハ  
先ツ志ひたけ山ヲ設ケ抜キ切法ヲ  
立テ永年場所ヲ變ゼザルヲ第一トス  
而シテ其場所ハ東南及ビ南西ニ向ヒタ  
ル乾キ良キ處ヲ撰ムベシ斯ル地ニハ  
志ひたけノ苗  
絲能ク生育  
シ得ルモノ  
ナリ之ニ反  
シテ山ノ  
北向或  
ハ山麓  
陰冷  
ノ地  
或ハ  
水邊ノ



濕地ニ於  
チナスハ  
利ナキ  
モノト  
知ル  
ヘシ

木實ヲ時キシモノ翌年  
 春ニ至リ發生スレバ  
 時々雜草ヲ取り除キ  
 二三年目ニ至リ他  
 ノ畑ニ移植シテ  
 培養スベシ



志ひたけノ培養ニ用ヒテ  
 益アル木類種々アリト雖  
 コナラオホナラ又ミスナワタカハ  
 クスギト云フアカシテアラシデ等  
 ラ最上トス而シテ此各種ハ秋實ヲ  
 採リ畑ニ畦ヲ作りテ蒔クベシ




實蒔ノ後四五年目ニ至リ苗一尺以上ニ  
 達スレバ山ニ植エ出スベシ大概一坪二本  
 植ウルラ度トス又従前柴或ハ秣場等ニ  
 ナシ置キタル山地ニハ前ニ云フ所ノ  
 志ひたけ培養ニ用フベキ木類ノ自然  
 生アリ之レヲ凡一坪ニ一本ツ、  
 立テ殘シ他ハ悉ク蒔リ取り後  
 ナ年々下タ蒔リヲ為シテ  
 要用ノ木ノミヲ繁  
 茂セシムベシ



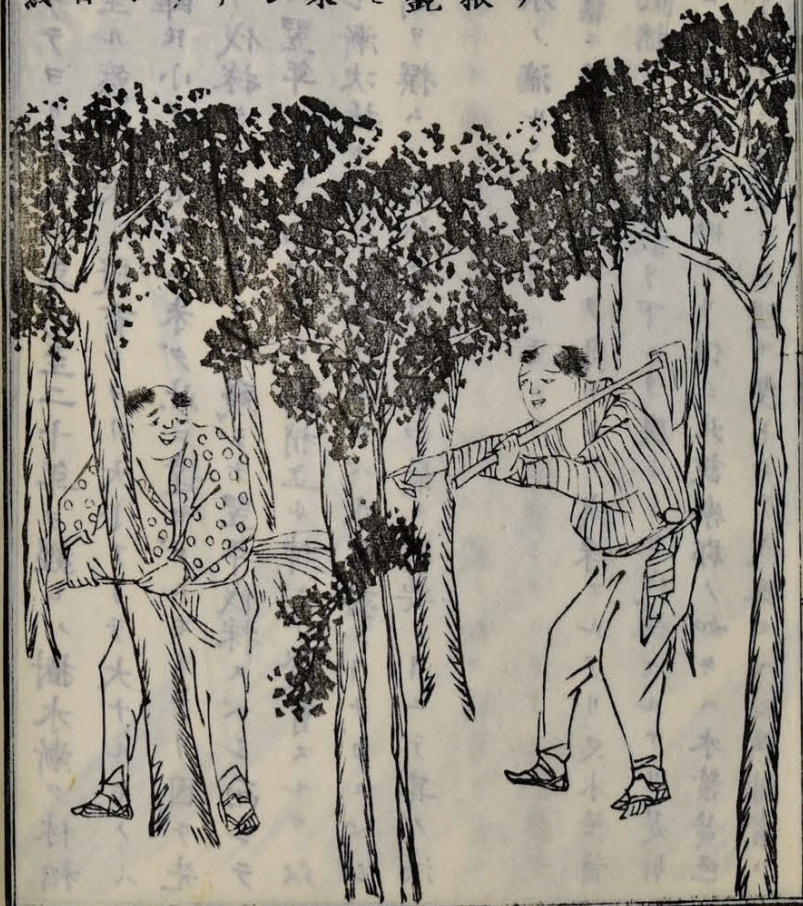
植付後凡二十年ヲ經テ徑  
 リ五六寸ニ至レバ之ヲ伐  
 採シテ草木ニ用フベシ但  
 シ林中樹下ニ小木雜草等  
 延ビ立タザル様ニスルヲ要  
 ス若シ森林陰鬱ノ處ニ成  
 長セシ木ヲ用フルトキハ  
 木皮ノ外面ヲ能ク掃除シ  
 他ノ菌類ノ生育セザルヤ  
 ウ注意スベシ



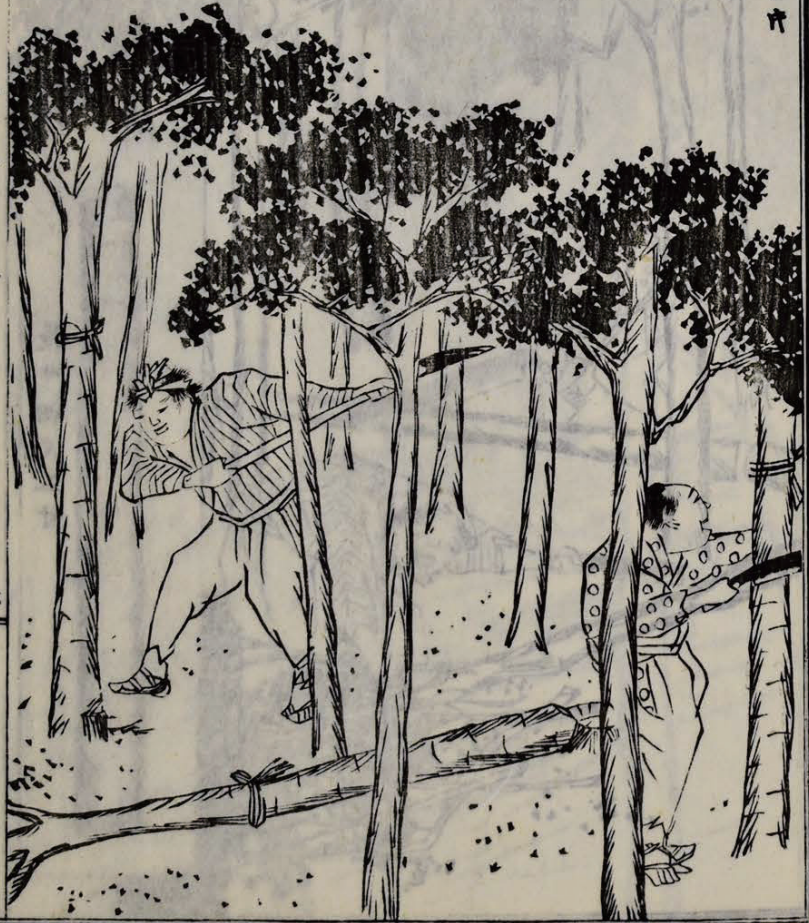
志ひたけ山ヲ設ケテヨリ十五六年乃至二十年ヲ經レハ樹木漸ク林相  
 ヲ成シ伐採期ニ至ル然レモ木ノ發育ニヨリ大小アリテ大ナルモノハ  
 伐採期ニ適スト雖モ小ナルモノハ未ダ此ニ達セザルモノアリ因テ先  
 ヲ大ナルモノヨリ伐採シ小ナルモノハ殘シテ翌年伐採スベシ而シテ  
 右ノ大ナルモノハ翌年ニ至リ切口ヨリ新梢立チ伸ビテ發育スルヲ以  
 テ之ヲ能ク培養シ漸次抜キ切りノ法ヲナサバ永年盡ルコトナカルベシ  
 而シテ伐採ノ時期ヲ撰ムハ志ひたけ培養中最モ肝要ノコトニテ其ノ法  
 種々アリ秋土用前十日頃ニ至リ鉋ヲ以テ  圖ノ如ク切目ヲ付ケ  
 切口ノ上下共ニ水ノ滴ル、コトナキニ至ルヲ適度トナスアリ又木葉黃  
 色ヲ呈シ將ニ落葉ニ至ラントスルヲ度トシテ伐採スルアリ又木葉黃  
 色ヲ呈シ樹幹ヲ動搖セバ黃葉散リ下ルヲ度トシテ伐採スルアリ是皆  
 伐採期ノ鑑定法ニシテ必要ノ件ナリ但シ北設樂郡ノ如キハ木葉黃色  
 ヲ呈シテ二分通りモ已ニ落葉セシ頃ヲ度トシテ伐採スベシ熟練者ハ



其ノ期ノ至レル  
 木ヲ撰ミ藁ヲ結  
 と付テ印ヲナス  
 ナリ己ニ印ヲナ  
 セシモノハ手ノ及  
 ブ丈ケ適宜ニ鈍目ヲ  
 付ケ鋸或ハ斧ニテ根  
 切ヲスベシ而シテ鈍  
 目ハ皮ノ厚薄ニ隨ヒ  
 深淺アルベシ是レ木  
 ノ肉ニ達スル迄ニシ  
 テ夫ヨリ切り入ラザ  
 ルヲ良トスレバナリ  
 鈍目ノ間ハ五六寸乃  
 至七八寸ニシテ互目  
 ニ付クベシ但シ自然



生ノモノヲ用フルヤ  
 ハ地勢ノ異ナルト  
 木ノ種類ニヨリ切  
 リ時ニ少差アルベ  
 シ寒冷ノ地ハ日ノ  
 後ル・ヲ良トシ  
 又森林幽鬱ニシ  
 テ他ノ小木ニ幹  
 ヲ埋メラル、處  
 ハ先ツ下ク水  
 ヲ切り除キ幹  
 ヲ風氣日光ニ  
 曝シテ切ルベ  
 シ



根切終  
リタラ  
バ初メ  
ニ切リ  
タルモ  
ノヨリ漸  
次ニ枝ヲ  
拂ヒテ長  
サ四尺五  
寸ニ切リ  
鉋目ヲ付  
クベシ但  
ニ根切リ  
シテヨ  
リ日數  
五七日  
經過  
スル  
ヲ良  
トス



長サ四尺五寸

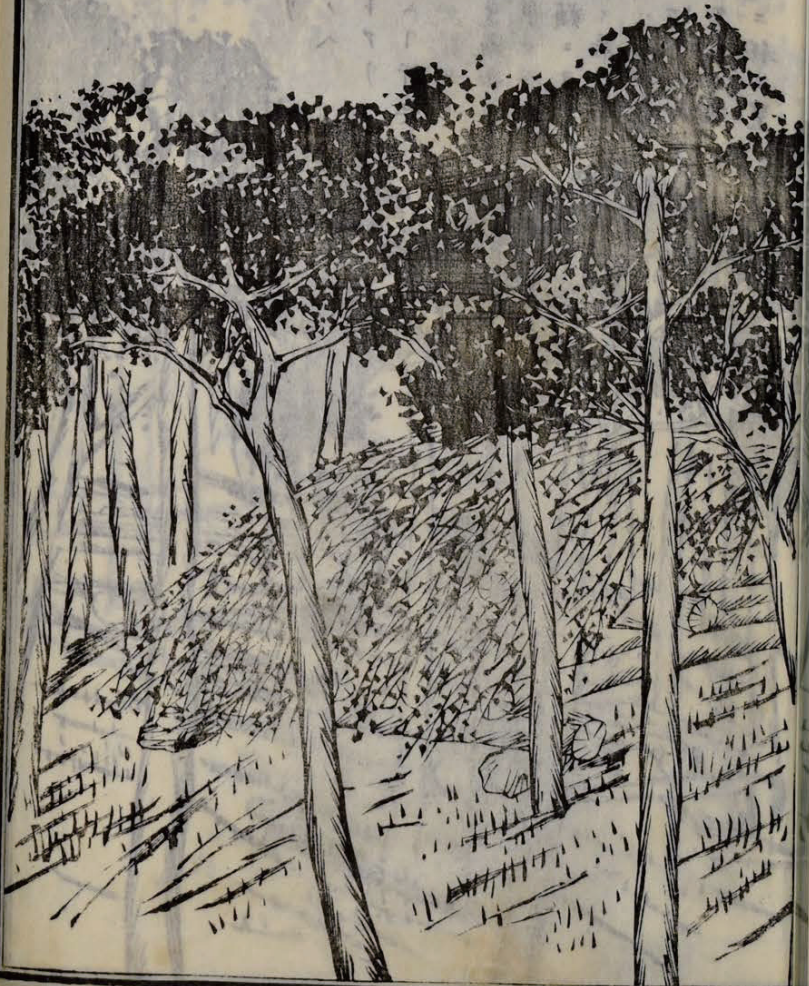
草木ノ準  
備整ハミ  
之レヲ處々  
ニ集メ枕木  
ヲ置キテ之レ  
ニ並列スベシ  
此置キ處ニヨリ  
志ハたけ菌絲ノ入  
ルト入ラザルトアリ  
其ノ場所ヲ撰ムヘ肝要  
ナリ其ノ法豫テ設ケタ  
ル志ハたけ山東南西ニ  
向ヒタル處ニ置クベシ  
而シテ木ノ種類ニヨリ  
區別スルヲ要ス若シ山  
ノ北向ノ處或ハ濕地陰  
冷ノ地等ニテ切リタル  
モノハ必ス能ク木ノ外  
皮ヲ掃除シ爰ニ移シ置  
クニ



嶮岨ノ  
地ニハ枕  
木ヲ高クス  
ルヲ要ス但  
シ枝葉ヲ覆  
フ一ハ前ニ  
全シ



藁木ヲ並べ  
終ラハ前ニ  
切リ拂ヒテ  
ル枝ヲ以テ  
之ヲ覆フベ  
シ林中ノ疎  
密ニヨリ覆  
枝ノ多少ヲ  
加減スベシ



藁木ヲ並べ  
終ラハ前ニ  
切リ拂ヒテ  
ル枝ヲ以テ  
之ヲ覆フベ  
シ林中ノ疎  
密ニヨリ覆  
枝ノ多少ヲ  
加減スベシ

藁木ヲ並べ  
終ラハ前ニ  
切リ拂ヒテ  
ル枝ヲ以テ  
之ヲ覆フベ  
シ林中ノ疎  
密ニヨリ覆  
枝ノ多少ヲ  
加減スベシ

室場近クニ  
致シテ適宜  
ノ處ニ集メ  
凡ソ三十本  
ツヽニ束ネ  
藤蔓等ヲ以  
テ之レヲ纏  
ヒ周圍ニ概  
ヒ常盤木ノ葉  
付枝ヲ以テ覆  
ヒ包ミ寒ヲ防  
キ且ツ木ツ、  
キキネノミ、  
等ノ害ヲ防ク  
ベシ

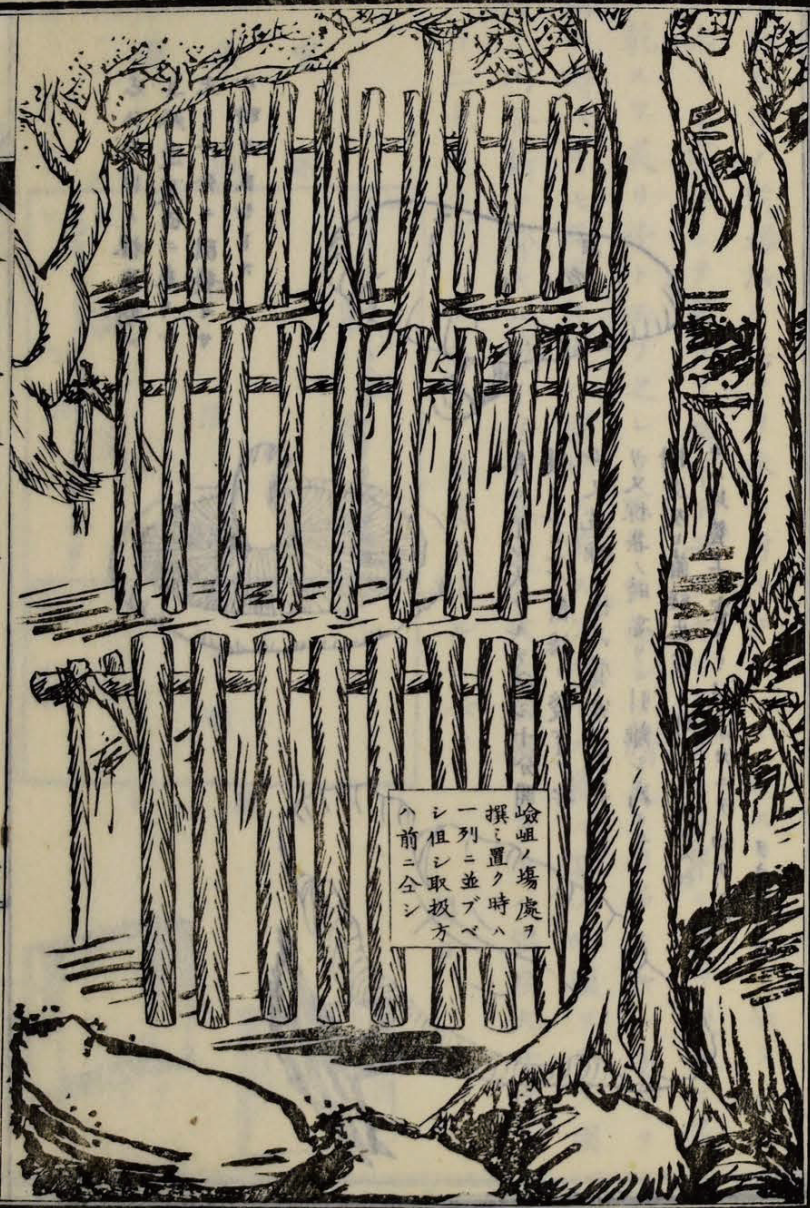


音圖屏

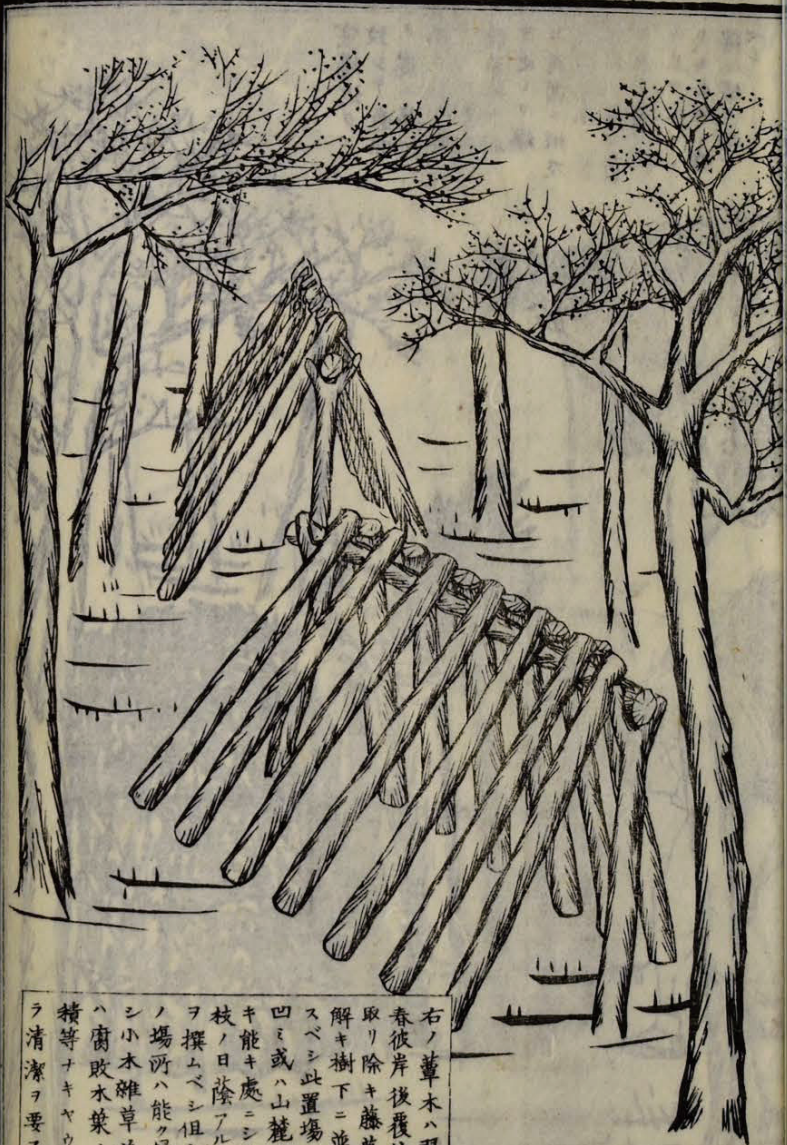


葦木ノ準備整ヒテヨリ凡  
十二ヶ月翌年十月頃ニ至  
レバ掃ニ名ひたけヲ發生  
スルヲアレ其ノ年ハ其  
ノ儘ニシ置キ翌々年春ニ  
至リ稍形手良キモノヲ發  
生セシム而シテ三年日十  
月ニ至リ多ク發生ス是ニ  
於テ始メテ葦木出來上リ  
タルモノトシ十一月ノ末  
室場ノ手近ナル處ニ運搬  
スベシ

音圖屏

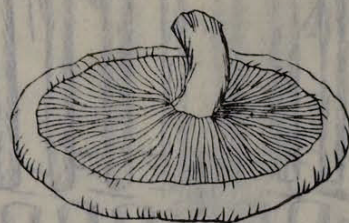


嶮岨ノ場處ヲ  
 撰ミ置ク時ハ  
 一列ニ並ブベ  
 シ但シ取扱方  
 ハ前ニ公シ



右ノ葦木ハ翌年  
 春彼岸後覆枝ヲ  
 取リ除キ藤蔓ヲ  
 解キ樹下ニ並ヘ出  
 スベシ此置場ハ山  
 凹ミ或ハ山麓ノ乾  
 キ能キ處ニシテ樹  
 枝ノ日蔭アル處  
 ヲ撰ムベシ但シ其  
 ノ場所ハ能ク掃除  
 シ小木雜草若ク  
 ハ腐敗木葉ノ堆  
 積等ナキヤウ專  
 ラ清潔ヲ要ス

志ひたけノ採集期ハ  
其縁邊裏面ニ巻キテ  
未タ十分ニ開發セサ  
ル時ヲ良シトス



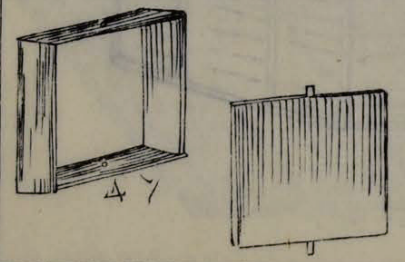
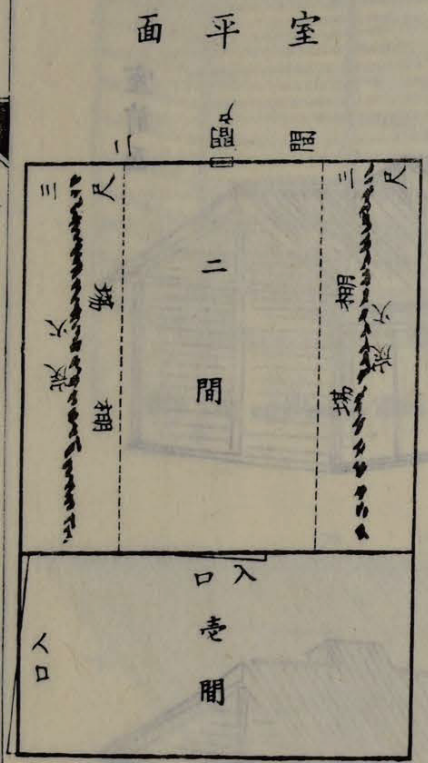
單ニ形ノ大ナルヲ欲シ十分開  
發セシムレバ菌絲ノ發育ヲ害  
シ又乾燥ノ後品質劣ルモノナ  
リ又採集ノ時安リニ引離シ為メニ  
樹皮及ヒ菌絲生育ノ部分ヲ採ルカ加  
キハ培養上ニ害アリ故ニ小刀ニテ切リトル  
ヲ良シトス



ヲ良シトス

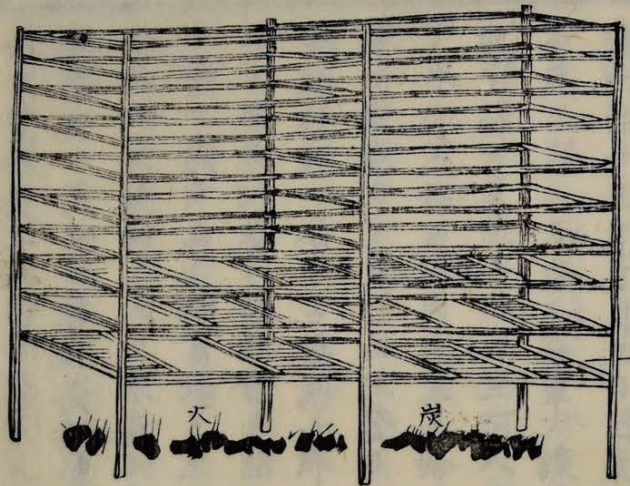
志ひたけノ乾燥法ニ三アリ木ニ付ケタルマ、乾スヲ木干ト云フ之レ  
ヲ上トシ室中ニテ乾スヲ焼干ト云フ之レヲ中トシ串ニ貫キ炭火ニ炙  
リ乾スヲ炙リ子ト云フ之レヲ下トス而シテ晴天ノ日多キハ木干ヲ  
爲シ得ベキモ雨多キハ室中ニ乾スヲ可トス爰ニ其ノ略圖ヲ示ス園  
村ノ川合新十郎氏ハ燒干法ニ熟達ス氏が經驗ニヨレハ温度九十度ヨ  
リ百二十度マデニテ善良ノ品質ヲ得ルト云フ

間戸



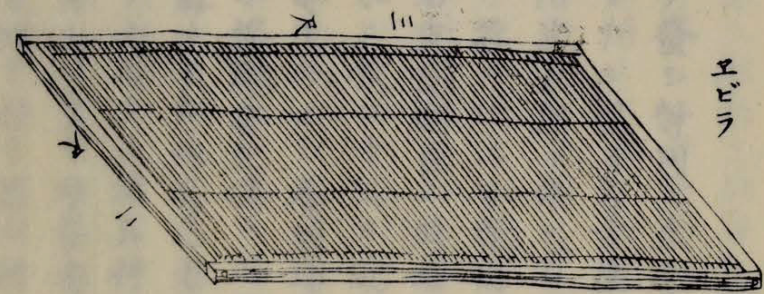
各草書長尺圖屏

香草器圖

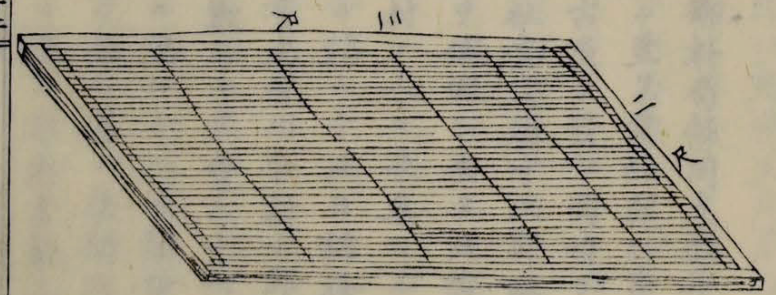


棚

エビラ

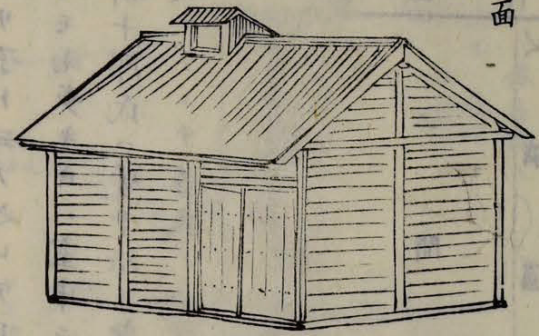


エビラ

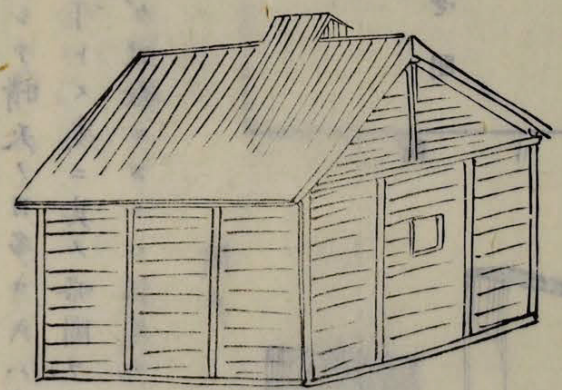


十二

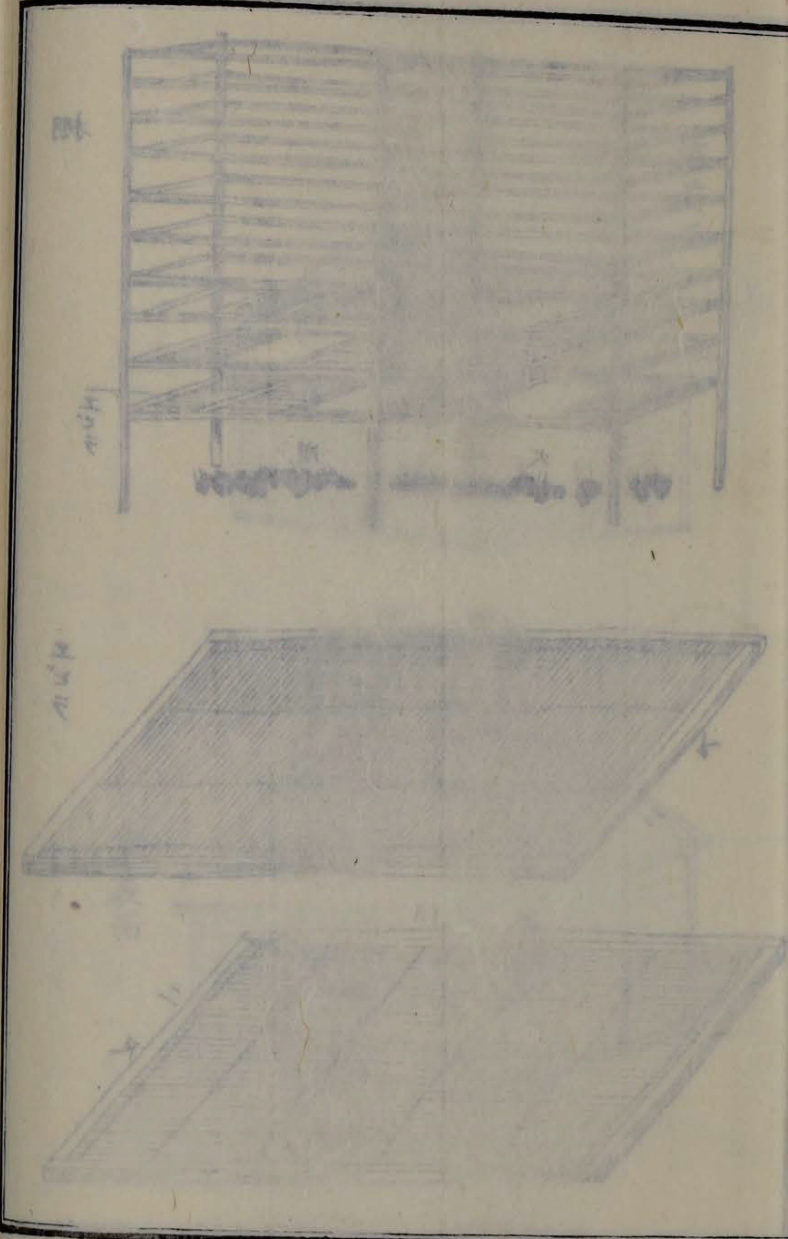
室前面



室裏面



香草器圖



香茸培養圖解跋

維明治廿五年五月九日予東京ヲ發シ静岡ニ至リ御料局静岡支廳長桑  
 名茂三郎ニ面晤シ香茸ノ談話ヲナス翌日名古屋ニ至リ愛知縣知事書  
 記官等ニ見ユ十一日三河人石川芝太郎ヲ伴ヒ名古屋ヲ發シ岡崎ヲ經  
 テ東加茂郡足助町ニ至リ鈴屋ニ投ス十二日報徳社貞安藤才次郎醫師  
 塚田憲亮等ト真弓山ニ登リ足助重範朝臣ノ故墟ヲ低回シ去テ北設樂  
 郡稻橋村ニ着シ古橋源六郎ノ家ニ投ス十三日近村ノ人々來集スルヲ  
 以テ香茸培養ノ談話會ヲ開キ尋テ井山ノ養殖場ニ臨ム十五日稻橋村  
 ヲ發シ段戸山ノ種畜場ニ至ル小幡郡書記其ノ外有志者川合新十郎等  
 同行ス夜近村ノ人々來會シ安藤才次郎外有志者數名モ來會ス十六日  
 納庫村ニ至ル安藤郡長臨席アリ十七日上津具村ニ至ル十八日開會十  
 九日豐根村字山内ニ至リ又大沼山ニ至リ培養場ニ臨ム其ノ夜榊原貞  
 五郎ノ家ニ宿ス廿日全村古真立村ヲ經テ黒川村ニ至ル有志者數人及



ヒ近村ノ人々來集シ談話會ヲ開ク廿一日富山村ニ至リ會話ス郡吏筒井喜三郎來テ小幡郡書記ニ交代ス廿二日園村ニ至ル廿三日近村ノ人々來會ス愛知縣農商課貞松崎農學士臨席ス廿四日本鄉村ニ至ル廿五日近村ノ人々來集シテ會話ス廿六日川合村ヲ經テ神田村字宇連ニ至リ宿ス此日安藤郡長及ヒ八名郡長途次ニ會ス廿六日振草村字粟代ニ至ル廿七日近村ノ人々來集シテ會話ス廿八日田峰村ニ至ル廿九日近村ノ人々來集シテ會話ス三十日田口村ニ至ル六月一日近村人々來集シテ會話ス愛知縣農商課負水野致堯及ヒ郡長村長等臨席ス二日納庫村字大名庫ヲ經テ段戸山ノ神澤ニ至リ培養ノ現況ヲ視ル而シテ田口村ニ歸リ投ス是ニ於テ北設樂郡内ヲ一週シ了リタルヲ以テ本郡ノ香草培養ニ係ル諸般ノ條項ヲ參酌シ本郡ニ適スル培養圖解ヲ作レリ六月七日田口村ヲ發シ稻橋村ニ歸ル小幡郡書記再ヒ同伴セリ九日稻橋村ヲ辭シ去テ駒山ニ至リ培養ノ現場ヲ視察シ東加茂郡大多賀村ニ

至ル小幡郡書記及ヒ丸太鏡三郎今泉佐五郎古橋信三郎等同伴ス安藤才次郎モ亦爰ニ會ス嚮ニ東加茂郡人ヨリ菌草談話ノ要求アリ故ヲ以テ大多賀村ニ至レバ近邊已ニ多人數來集セルヲ以テ夜會ヲ開ク十日明川村ニ至ル人々又集ル爰ニ會話シ午後五時足助町ニ至ル鹽田郡長并ニ郡吏村吏有志者集會シテ談話ヲ開ク十一日國關村ニ至リ談話ス十二日松平村ヲ經テ中垣内村ニ至ル途次豐榮村ニ來集スル者十數名即チ路上ニ談話ヲナス十四日中垣内村ヲ發シ岡崎ヲ經テ名古屋ニ至リ縣廳ニ出テ兩郡回歷ノ實況ヲ具陳ス十七日歸京スルヲ得タリ夫レ北設樂郡ノ地ハ至ル處山岳重疊運搬極メテ不便ナルガ爲メ木材ノ空ク腐朽ニ屬スルモノ少ナシトセス故ニ本郡ノ有志者大ニ感發シ香草培養上ニ改良ヲ加ヘ將來一大産額ノナサンコトヲ企圖ス蓋シ目的ヲ達シ得ルヤ數年ヲ出デザルベシ他日其目的ヲ達シ得ルノ日ニ至リ廿五年ノ今日始メテ此ニ相見ルノ時ヲ想ヒ起スコトアラン聊カ經歷スル

所ヲ記シテ以テ他日ノ考證ニ供フト云フ爾

明治二十五年七月三日

田中長嶺再識

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 所ヲ記シテ, 以テ他日ノ考證, 供フト云フ爾, 明治二十五年七月三日, 田中長嶺再識]*

全 明治廿五年九月三日印刷  
年九月五日出生

定價金拾錢

版權  
所有

著者 田中長嶺

發行兼 愛知縣平民  
印刷者 石川芝太郎

發賣所 名古屋市南長島町  
石川芝太郎

東京市神田區猿樂町  
二丁目拾壹番地寄留

